

私が失明したのは東京オリンピックのあった前年で、もう二十三年が過ぎた。盲人会へ入ったのは昭和三十八年六月十日で、時の流れがすべてを解決してくれることを信じて、時の記念日を選んで入会したのであった。ふり返ってみるときの歳月の流れは苦闘の連続であったように思うが、その障害を一つひとつのり超える度に、新鮮な発見と大きな喜びがあったのも事実である。

私は幼くして発病したせいもあってか、目の見えていた頃は内向性が強く、人と顔を合せて話ができず、とてもはにかみ屋で目立たない子供であった。だから小学生の頃には、唱歌の時間になると本のかげに顔を隠して歌わず、先生に叱られたこともあったり、質問された問題が分かっていても、進んで手を上げて答えることなどはしなかった。また入園してからも、病棟の看護作業や購買部の売り子をしていたが、冗談も言えず、同僚が猥談を始めると顔を真っ赤にそめてその場を離れるのであった。そして寮員同士で忘年会をしても一滴の酒も飲めず、もちろん歌などはうたえなく、人付き合いの下手な人間だった。暇があるとスケッチブックを持って瀬戸内海の風景を描いたり油絵の筆をとるのを趣味にしていた。夜には療養のつれづれに日記を欠かさず書いていたが、知らない字は辞典を傍におき、できるだけ漢字を覚え、その意味を理解しようとしてとめた。

私の少年期はいにくの戦時下で、教科書やノートも不足がちで勉強はろくにできず、防空壕掘りや竹槍訓練をさせられ、また一家の働き手が出征した家庭へ勤労奉仕をするのが日課になっていた。だから義務教育とは名ばかりで、終戦の年に卒業したのであったが、病気の兆しが顔にあらわれ籠りがちであった私は、ペン習字の本を見ながらくずし字を憶えたりして、殆どが独学であったように思う。

二十六年十九歳で入園した私は、特效薬のプロミンに期待をかけて治療を始めたが、体質に合わなかったのか、やがて虹彩炎を起こしたり、顔一面の湿疹や熱瘤に加えて激しい神経痛に日夜さいなまれるようになった。そして病棟への入退院を繰り返しているうちにじわじわと視力を犯され、激痛の果てに三十七年二月二十八日左の眼球を摘出し、残る右目の視力も低下の一途をたどり、遂に光りを失ってしまい、四十二年十二月七日末練を覚えながら眼球を摘出してしまった。あのとき横たわった手術台の冷たさと、触れ合う医療器具の非情なひびきは、今尚耳に焼きついて離れない。

しかし依存する者もない独身だったので、身の廻りのことや白杖にも比較的早く馴れ、職員看護に切替えられた第一不自由者センターに入居したのは、三十九年一月十六日であった。そしてその年の四月には盲人会の役員に選ばれ、全く不馴れな議長という重責を荷負わされたので、いやが応でも盲人生活に同化しなければならず、第二の人生を夢中で歩き始めたのであった。

そんな逆境の中で点字を覚え、ハーモニカを習い、点字図書館の落成式ときにはハーモニカバンドをバックに、生れて初めて「夕日の丘」を歌った。目が見えなくなると口だけが頼りなので、どうしても人前で話をしなければならず、次第に冗談も言えるようになってきた。単調な生活を少しでも豊かにしようと、川柳を習い、短歌を作り、詩も書き、ややもすると忍びこもうとする絶望感を寄せつけけないように、自虐的にも思える程の精神的にも肉体的にも、自らを酷使用する日々を送っていたのである。

そんな中で眼痛や神経痛のため、三十年頃から濫用し続けてきたブレドニンの薬害で、夜となく昼となく襲ってくる心臓発作に見舞われ、生来無嗅覚の上に口内中が白い膜に覆われて全く味覚も失ってしまい、知人からもらった細長いさつまいもをバナナと勘違いして、口で皮を剥こうとしたがどうしても剥けず、笑うに笑えない失敗もあった。人間は五感で生かされているというが、視覚も嗅覚も味覚も知覚も失ってしまい、聴覚だけが生き甲斐になった毎日は、無味乾燥の一語につきるものであった。

そして四十五年三月末にショックを起こして、遂に病棟のベッドで意識を失ってしまった。死線をさまよう中で、白雲に乗り下界を見下しながら天に上る幻覚をおぼえ、われに返ったときにはひどい言語障害を起こしていた。故郷からかけつけて看護をしてくれていた母や姉たちも、そんな私を案じながら帰っていったが、少し落ち着くとひたすら私は発音の訓練をかねて録音機に向かい、川柳や短歌を繰り返して繰り返してこむのであった。

ちょうどその年は大阪において万国博覧会がくり広げられていたが、そんな華やかさをよそに、私は失明を機に書き綴ってきた詩、短歌、随筆を生証として一冊にまとめようと考えたのである。それを知った多くの友人知人によって、これまで書きためたものを清記してもらっていたが、病状が好転するに従って忘れるともなくのびのびになっていた。

そうした四十九年再び体調をこわして入院し、猛暑もこたえて体重が三十六キロにまで衰えてしまった。そこで墓碑がわりとして再度出版を思いつき、現在の個室化された新センターの部屋で原稿を整え、あとがきを書き、政石蒙さんの手を借りて編集し、「美しき非情」と題して五十年の六月に出版をみたのである。

ところがこの本の序文がわりに、ありし日面会にきた母と大島会館をバックに撮った写真を使ったことが、肉親にとっては歓迎されないものとなった。しかし私は無菌になった現在の医療の進歩と偏見を除去する意味から、ピーアールを兼ね敢えて使用した。また記憶の底に生きている母との絆を永遠に残す願望も秘めたものであったが、各方面や新聞社などにお送りしたところ、内容の深刻さにひきかえ、見出しの明るさに驚きの紹介がなされ、思わぬ感激と励ましの便りが数多く寄せられた。これも失明のお蔭と言わなければならぬ。この年は「ハンセン病を正しく理解する週間」に因んで、高松宮同妃両殿下が六月二十四日にご来園されるという、記念すべき年でもあった。

こうして光りの世界から暗黒の世界へと順応する道程はまことにきびしくもあり、また険しいものであったが、光りと闇の葛藤のなかで、盲人にもそれなりの夢やドラマのあることを悟り、障害の総てを受け入れることによっておのずから道が拓け、笑顔が浮かび、ゆとりさえ湧いてくるのである。

目の見えていた頃はあれ程消極的であった私も、島一休止のペンネームで「ふあうすと」へ川柳を投稿していたが、四十四年には義眼になったことや、それをかくす母との面会を主材にした句が「全人抄」の巻頭を飾ることができ、グループ員の祝福を受けた。また「林間」にも闘病の実感を詠んだ短歌が推薦欄にたびたび掲載され、NHKの「療養の時間」に応募した詩が入選するなど、喜びがつきつきと与えられたのである。

川柳を除くそれらの作品を収めた「美しき非情」を通して思わぬ人との出会いや心のふれ合いが大きく広がっていったが、この方々については次回にゆずることにする。

(つづく)

(61年11月記)